伝説のテクノロジー
Legendary technology
47

弦師 澤山倫弘さん

ひたすら歩む弓弦（ゆみづる）づくりの道

弓道や流鏑馬などで使われる和弓の
弦をつくっているところは、
全国でも5〜6軒程度しかないという。
古来からある麻の弦をつくれるところとなると、さらに限られる。
澤山弓弦製作所は、その数少ない弓弦の工房。
麻の弦と合成繊維の弦を合わせて
1日に約700本から800本ほどをつくっている。

力技で竹に弦を張る

澤山倫弘さんは毎朝、７時前から仕事を始める。１日にこれだけの弦をつくるには、そうしないと間に合わないのだという。澤山弓弦製作所では弓弦づくりを分業制で行っている。澤山さんは、「若い衆」と呼ぶ男性の従業員とともに、竹に弦を張る作業を主に行っている。

直径３〜４センチ、長さ３メートルほどの竹の先端を作業場の壁に押し当て、体重をかけながら力を入れてたわませ、麻の繊維を縒（よ）ってつくった弦を両端にかける。この竹は何度も何度も使いまわしているものが多いので、たわみやすくはなっている。だがそれでも竹の棒を弓のようにたわませるためには、相当の力が必要だ。

作業を始めて数分もたたないうちに、澤山さんの額から玉のような汗が噴き出してくる。

「夕方の５時頃、作業を終えると魂が抜けます」

と、若い衆が言う。精も根も尽き果てるくらい疲れるという意味のようだ。

「相当な力が必要なので、女性には難しいでしょう」

と、澤山さんも言う。

だが、むやみやたらに力をかければいいというものではない。

「いきなり力を入れすぎると弦が切れてしまい、商品にならなくなってしまいます。そこは気を使うところ。竹のたわみ具合と弦の張り具合を見ながらバランスよく力を入れる必要があります。力仕事ではありますが、繊細さや注意力も欠かせません」

という澤山さんは、弓弦づくりの工程で、この“張り”の作業が一番好きだという。

「リズミカルに作業するのが楽しいんですよ。若い衆と並んで作業しますが、僕がテンポを上げると、若い衆のテンポも上がってくるんです。肉体的にはハードですが、僕はこの仕事が好きだから、苦になることはないですね」

有段者が好む麻弦

澤山製作所では祖父の代から栃木産の麻を使っている。ただ、最近の麻は以前に比べると弱くなったという。

麻は、大麻の原料になるため、栽培するには許可が必要であり、栽培にはさまざまな制約がある。そのため大麻をつくれないようにすることを目的とした、品種改良が続けられてきた。麻が弱くなったのはそのせいではないかと、澤山さんは推測している。

澤山弓弦製作所は創業約80年。澤山さんは20歳の頃から仕事を手伝い、３年前、父親の晃さんが他界したのを機に３代目を継いだ。

さわやま みちひろ　1971年、静岡県生まれ。澤山弓弦製作所代表取締役。祖父の代から続く弦づくりを20歳の頃から始めて、現在は外注先も含めて15〜16人を統率して弦づくりに励んでいる。趣味はフットサルと旅行。

弦を竹に張り、水で濡らしたスポンジで何度も上下にこき下ろす。

仕上げに松やにをひまし油で煮て練り合わせた薬練を塗る。

「親父から仕事を教わった記憶はあまりありません。作業手順を書いたマニュアルのようなものもありません。親父の仕事を見ながら真似をするようにして自分もやって、感覚を体で覚えていったんでしょうね」

弦づくりは分業制だが、弓矢づくりもまた分業制である。矢をつくる職人は矢師、弓をつくる職人は弓師と呼ばれる。澤山さんたちのように弦をつくる職人は弦師と呼ばれる。

弦の素材はかつて麻が使われていたが、今は切れにくく品質が安定している合成繊維の弦の方が多い。ただ、合成繊維と麻では弓を引いたときの弦音が違い、麻の弦を好んで使う人も少なくない。特に有段者には、麻弦を使う人が多いという。

麻弦の場合、まず麻の繊維を裂いて糸状にし、それを何本も縒り合わせて１本にする。そして接着剤に漬けてから竹に張り、乾燥させてからまた縒りを入れる。１日にその作業を３回繰り返し、仕上げとして弦に「薬練（くすね）」を塗る。弦を補強するとともに、表面が毛羽立つのを抑えることが目的だ。

ひまし油でロジンを煮込む

薬練の原料は松やに（ロジン）である。ただ、そのままでは硬くて弦に塗ることができないので、ひまし油で煮てペースト状にする。澤山製作所では30キロくらいの固形のロジンを購入し、２週間に１回くらいのペースで薬練をつくる。ロジン７、ひまし油３くらいの割合で混ぜ、しばらく煮込み、１回冷ましてからシンナーを入れて薄め、また煮込むという作業を３～４回繰り返し、ほぼ１日かけてつくる。

以前はゴマ油で煮ていたが、色がくすんでしまうことがあるため、５～６年前からひまし油を使うようになったという。夏の暑いときはやや硬め、寒いときには少し柔らかめというように、季節に合わせて微調整もしている。

「今はチューブ入りの市販品もあります。でも、やはり自分でつくった薬練の方が、使いやすいですね」

ちなみに「手ぐすねを引く」という言葉はこの薬練を語源としている。

製作所で働く人は現在8名。補強のために、弦の両端に布を巻く。

弓弦の完成品。弓のサイズで長さも変わる。

手の指に松やにを塗って、いつでも弓を引けるように準備万端、整えておくという意味である。

薬練を塗って乾燥させたら、補強のため弦の両端に布を巻く。もとは絹の布だったが、澤山製作所では綿の布を使っている。

「この布を巻く作業も難しいんです。接着剤を付けて隙間なくびっしり巻かないと、引いているうちに布がずれてきてしまうからです。弦づくりの重要なノウハウの部分で、どこもこの作業はよそに見せません」

ということで、今回の取材でも布を巻く作業は手元の撮影許可が出なかったほどだ。

こうしてでき上がった弦は、全国の弓具店に卸している。

「弓道人口は14万～15万人と言われています。エンドユーザーに直接話を聞く機会はあまりありませんが、ネットでユーザーの意見を知る機会はあります。うちの弦は品質にばらつきがなく、値段の割に扱いやすいと言われています。合繊の弦は初心者から有段者まで幅広く使われています」

そういう澤山さんも５年前くらいまで分からないことが多かった。実際、自分も弓道を経験すると、弦が硬すぎると引きにくいなど微妙な加減が分かるようになったという。

思いついたことはすぐ試す

意外に知られていないが、弓道にもオンシーズンとオフシーズンがあるという。冬場は寒いので、弓を引くことが少なくなるためだ。そのため澤山製作所はオフシーズンを新商品を考える時間に充てている。

「弦は、硬すぎても、柔らかすぎてもいけないんです。扱いやすい、程よい硬さがあるんですね。そういうところはやはり、自分で弓を引いた経験がないとなかなか分かりません。仕事をしているときでも、思いついたことはすぐ試してみるようにしています」

20歳のときに始めてすでに26年。もうベテランである。だが、それでも澤山さんは、よりよいものをつくるための努力を惜しまない。これぞまさしく弦師の真骨頂である。